

古典文法トレーニング 長文課題 品詞分解と現代語訳

大問二八（出典：『宇治拾遺物語』）

◎品詞分解（名詞は基本的に非表示。非活用語は基本的に初出のみ。同色の助詞は同内容を示す。）

さて廿日ばかりありて、この女格助(主格) フ上・用の居格助(主格) フ上・用たる方に、雀のいたく鳴く声しければ、「雀こそいたく鳴くなれ。ありし雀の来るにやあらん」と思ひ出でて見れば、この雀なり。「あはれに忘れず来たるこそあはれなれ」と言ふ程に、女の顔をうち見て、口より露ばかりの物を落として置くやうにして飛び往ぬ。女、「何にかあらん。雀の落として去ぬる物は」とて、寄りて見れば、瓢の種をただ一つ落として置きたり。「持て来たるやうこそあらめ（※1）」とて、取りて持ちたり。「あないみじ。雀の物得て、宝にサ変・用 係助(子) 父し給ふ」とて子ども笑へば、「さはれ、植ゑて見ん」とて植ゑたれば、秋になるままに、いみじく多く生ひ広がりて、なべての瓢にも似ず、大きに多くなりたり。女悦び興じて、里隣りの人にも食はせ、取れども取れども尽きもせず多かり（※2）。

※1：「やうこそあらめ」は「理由があるのだろう」と訳す、類出慣用表現。

※2：「多し」のみ、連用形のみならず終止形にも「多かり」が存在する。中古の和文でよく用いられる。

◎現代語訳（『ステップアップノート30 古典文法トレーニング』参照）